

レポーター：学芸員の中尾さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：この作品は一体どういったものになるんですか。

学芸員：これはもう、ほんとに見たままの作品です。

レポーター：そうですよね。私、遠くから歩いてきたときに、うわっ、水滴が壁にあると思ったんですけど、そのままの感想で大丈夫ですか。

学芸員：そのままで大丈夫です。

レポーター：こう写真ではなくて、もちろん絵なんですよ。

学芸員：そうですね。ほんとにこれは、この美術館で一番と言っていいくらい人気のある作品で、誰もがなんかふっと通り過ぎようとするんですけど、はっと立ち止まってバックしてくる、そしてじっと見る。で、横から見ると、いろんな角度からなんか見て行かれる作品なんです。なので、ゆっくりちょっと見て頂きたいなと思うんですけども。

レポーター：たしかに遠くから見るとちょっとびっくりしますよね。壁に水が！って思って、写真かなって思うんです。横で見ると、あっ、絵なんだって言うような。

学芸員：それがかなりリアルなんですよ。

レポーター：どういった方が描かれた作品なんですか。

学芸員：これはですね、韓国の男性の作家さんなんですよ。もうけっこう、今では髭もばあっていっぱい生えたりとか、かなり年配のおじいさんなんですよ。だけど、パリ暮らし。

レポーター：ほお～。じゃあ、モダンなお洒落なおじいさんを想像してるんですけど、合っているのかな。

学芸員：今、多分ですね、7, 80歳くらいのおじいさんなんですけど、実際、結構大変な人生を生きてこられて、生まれたのは今の北朝鮮なんですよ。

レポーター：はい。

学芸員：それで、若い時にソウルに出てきて、ちょうどその時に朝鮮半島で戦争が起きた時なんですよ。それ以来、北と南と別れてしまっ、それ以来戻れない。実は。

レポーター：えーっ。

学芸員：故郷に戻れないまま、韓国、あるいはパリで、こういった抽象絵画というんですけども、制作しているアーティストなんです。

レポーター：そうなんですよ、なんか絵からは想像つかない。

学芸員：つかないですよ。

レポーター：壮絶な人生を送ってらっしゃる方が描いた絵なんですよ。

学芸員：そうなんですよ。で、この方はほんとに水玉ばかり描いてるんですよ。

レポーター：えーっ。

学芸員：もう、ずっと、すごい長いキャリアがあるんですけど、飽くことなく水玉ばかり描き続けてるんですよ。

レポーター：ちょっと、他の水玉も見てみたい。

学芸員：見てみたい…多分、僕らが見ても全然違いがわからないと思うんですけど、彼は多分何かすごいこだわりがあるんだと思うんですね。韓国では、今この絵、水玉の人っていったら、美術好きな人だったら、あっ、あの人、っていうくらい、かなり有名な人なんです。

レポーター：そんな作品がここアジア美術館で見ることができるんですね。

学芸員：これはほんとにいつ来ても見て頂けるように、展示しています。

レポーター：思わずふと立ち止まって、じっくり。あの、失礼言い方なんですけど、ただ何気ない水玉なんですよ。多分、でも、なぜか引き込まれるような絵ですよ。これは実際に来て頂かないと伝わらない。

学芸員：伝わらないですよ。はい。

レポーター：これは、布に描いてるんですか。

学芸員：そうですね、麻布に描いてる、普通絵って下塗りするんですよ。

レポーター：はい。

学芸員：それは下塗りせずに、そのまま水滴だけを描いてるんですよ。だけど、水滴、よくほんとにね、これは実際に見て頂きたいんですけど、なんかやっぱ水滴が壁とかにこんなにたくさん。しかも、何て言うのかな今にも何て言うのかな、こぼれ落そうぐらいのね、感じで留まっているというのは、ありえないんですよ。

レポーター：うん。ありえないです。

学芸員：パッと見ると、写真みたいだし、写実的だから、すごく現実っぽいでしょ。だけど実は、こんな情景はありえない。

レポーター：そうですね。

学芸員：そこら辺をそのなんかこう一つ一つ、何かこう、水滴を見て、あんまりこう変な知識とかいらないうるんですよ。ただ、見て、で、何かこう感じてもらったら、ほんとにいいなという作品です。

レポーター：じっくりと、眺められる、時が止まったような絵ですよ。

学芸員：まさにほんとに一瞬止まった感じの瞬間なんですよ。

レポーター：是非、実際に来て、ゆっくりと見て頂きたいですね。

学芸員：そうですね。

レポーター：はい。

学芸員：はい。

レポーター：ありがとうございました。

学芸員：はい。